



なでしこジャパンと戦国武将の家紋

(公財)日本植物調節剤研究協会 評議員
日本曹達株式会社 農業化学品事業部開発部長
岡本 隆之

FIFA 女子ワールドカップ カナダ大会がこの原稿を書いている6月6日から始まり、7月5日まで開催されます。4年前(2011年)のドイツ大会では日本が初優勝し、東日本大震災直後の多くの日本人を勇気づけてくれました。今回の優勝候補はFIFA ランキング1位のドイツですが、前回チャンピオンのなでしこジャパンも、沢穂希選手が復帰してチームの調子もあがってきました。世界サッカー連盟(FIFA)は汚職事件で揺れています。素晴らしいゲームの数々でこの嫌なムードを吹き飛ばしてもらいたいものです。

さて、サッカー日本女子代表の愛称である「なでしこジャパン」は、日本女性の清楚な美しさをたたえた大和撫子という言葉からきていますが、秋の七草のひとつなでしこの別名でもあります。本州以西に広く分布し、主に日当たりの良い草原や河原に生育する在来雑草で、古くから日本人の生活と密接な関係があります。戦国時代初頭的美濃の武将で、司馬遼太郎の小説「国盗り物語」の主人公としても知られる齊藤道三は、この可憐な“なでしこ”を家紋のデザインにしています。

徳川家の家紋が“葵”であることは広く知られていますが、豊臣秀吉は“桐紋”，織田信長の家紋は“木瓜(もっこう)紋”と呼ばれキュウリの切り口に似たかたちをしています。また本能寺で織田信長を討った明智光秀の家紋は“桔梗”です。このように多くの戦国武将が自然の造形美を愛し、植物を家紋のデザインにしています。

昨年NHK大河ドラマの主人公、軍師黒田官兵衛は“藤巴(ふじどもえ)”を家紋としました。官兵衛は、荒木村重によって有岡城の陽も差し込まない暗い土牢に1年間幽閉されていましたが、1本の藤のつるが伸びてきたのをみて生きる希望を見出し、藤を家紋にしたという話が残っています。諸説あつて信憑性は定かではありませんが、藤は繁殖力が高いことから、縁起がよいとされ多くの家紋にとりいれられています。

おもしろいことに、雑草のおもだか、かたばみ、なずな

どの雑草も多くの戦国武将の家紋に使われています。水田雑草でもある「おもだか」は、7月から8月のはじめに白い可憐な花をさかせますが、人の顔に似た葉を高く伸ばしている様子をさして面高とされたとも言われています。群生している様子は、まるで矢尻を並べたように見えるため、武士に好まれ「勝ち草」ともよばれました。戦国時代の中国地方の覇者毛利氏も家紋の一つとして“おもだか紋”を使っています。毛利元就が合戦に臨んで的と対峙した時、おもだかにとんぼが止まっているのを目にし、「勝ち草に勝ち虫、勝利は間違いない」と全軍に号令して大勝利したことを記念しておもだか紋を家紋にしたとのこと。ちなみにトンボも前にしか進まず不退転の精神を表わすものとして、「勝ち虫」とされていました。

一方、畑地雑草のかたばみのほうは、ハート型の3枚の葉に、黄色い五弁の花を咲かせる植物。葉を財布にいれておくと、いくら使っても減らないという迷信から黄金草と呼ばれ、一度根付くとなかなか根絶できないことが「家が絶えない」に通ずると、多くの家紋に使われるようになりました。四国統一を成し遂げた土佐の長曾我部元親は、7枚の葉をかたどった“七つかたばみ”を家紋として使っています。戦国時代の武士にとって、家紋は敵味方を区別する意味がありましたが、古来から詩に詠まれた桜や梅だけでなく、道端に咲く雑草を愛し、特徴を詳しく観察して、そのデザインを家紋にとりいれたことは興味深く思われます。

なでしこ、おもだか、かたばみなどの雑草と戦国大名についてふれてみました。掲載号が発行される頃にはワールドカップの勝敗は決しているはずですが、日本代表の「なでしこ」たちが、雑草魂を発揮して再び多くの人に感動をあたえてくれていることを願っています。